767類
61號

41010

教科書文庫
4
760
41-1909
25980
04949

教科書文庫
4
760
41-1909
2598004949

文部省檢定濟
明治四十二年三月五日

天谷秀編

最新中等唱歌集

縣第五号
音樂
部冊數一
和

769類
61号

第4949號

十字屋樂器店發行

最新中等唱歌集

緒言

一近世、科學的教法、大に發達し、公私設立の諸學校、師範學校、中學校及高等女學校等、日に月に隆盛し、其程度ます〳〵高まるに從ひ、屢々新教材を需むる者多きの觀あり、依て是に中學科の資に供せむか爲め、此の新選教材を編纂せるものなり。

一本書、收むる所の歌詞は、文學諸大家に請ひ、特に作咏せられたる者、作曲は數番の原曲を除く外、現今斯道に嘖々たる名家諸氏の作に係る者を集めたり。

一本書所載、歌曲の順序は、素と其難易に依れりと雖も、或は教授者に於て施用の手段として、任意に之を變更せらるゝも妨げなし。

明治四十一年五月

編者識

広島大学図書
2598004949

目次

第一　運動會歌……四
第二　海……六
第三　海國女子……八
第四　帝國海軍……一〇
第五　秋の散歩……一二
第六　日光……一四
第七　音樂會……一六
第八　秋野……一八
第九　校友會閉會の歌……二〇
第一〇　曉の旅……二二
第一一　詠史……二四
第一二　月……二六
第一三　窓の小鳥……二八
第一四　建都……三〇
第一五　海水浴……三二
第一六　長良河の鵜飼……三四
第一七　古戰場……三六
第一八　芳野山……三八
第一九　薩摩守忠度……四〇
第二〇　神州男兒……四二
第二一　落機山吹雪……四四
第二二　山家の初冬……四六
第二三　惠の波……四八
第二四　樂聖……五〇
第二五　黃鳥……五二
第二六　春の歌……五四
第二七　端艇競漕……五六
第二八　初夏……五八
第二九　山居の美……六〇
第三〇　姫百合……六二

以上

運動會歌

旗野十一郎

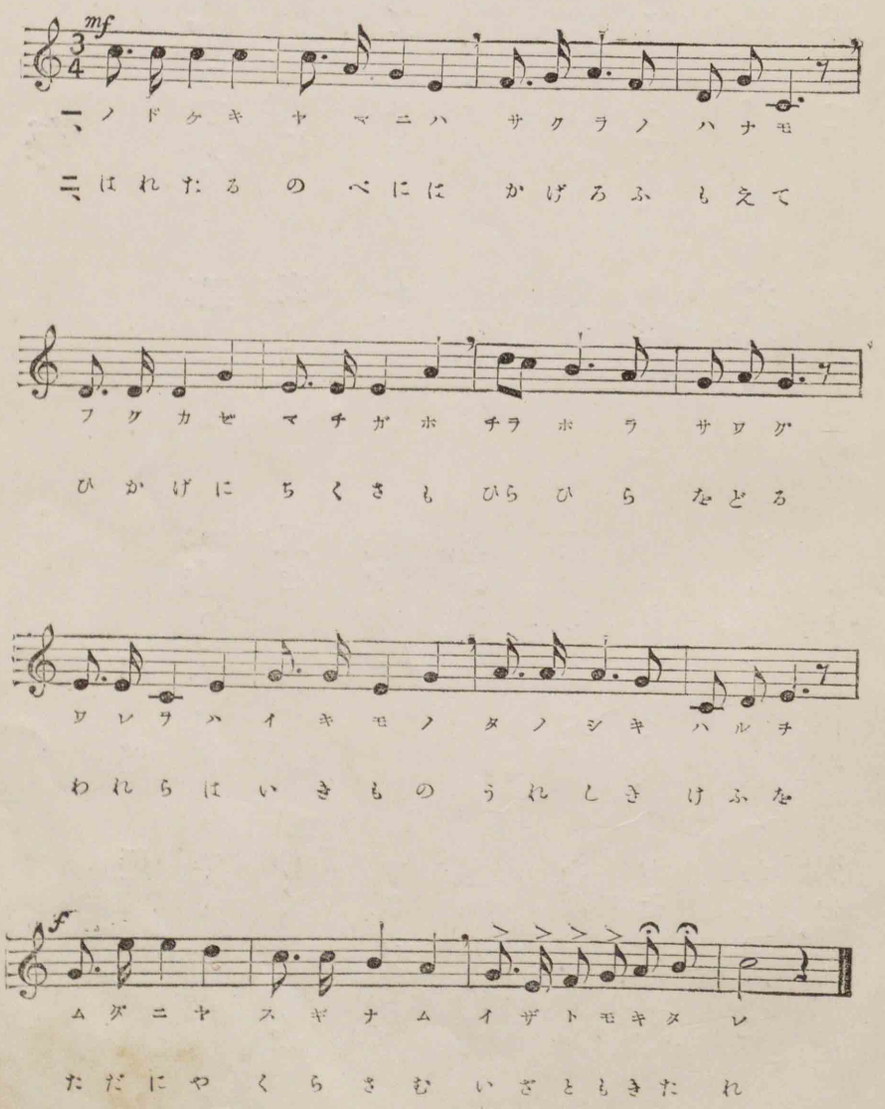
一、長閑き山には、さくらの花も。吹く風まらがほ、
チラホラさわぐ。吾等は活物、たのしき春を。
空にやすきなむ、イザ友きたれ。』

二、晴たる野べには、陽炎燃えて。日影にちくさも、
ヒラヒラをどる。吾等は活物、うれしき今日を。
徒にやくらさむ、イザ友きたれ。』

運動會歌

天谷秀

Allegrezza. ♩=120.



海

一、波を蹴たて、　黑けむり。
片帆に眞帆に、　高くあげ。

二、見わたしひろく、　かぎりなき。
神のしらせる、　國なれば。

三、海はゆたけき、　時もあり。
ゆたけしとても、　ゆだんすな。

四、數の寶を、　大君に。
道を開きて、　待ちてあり。

加部　嚴夫

渦卷わたる、　船もあり。
風をはらみて、　ゆくもあり。

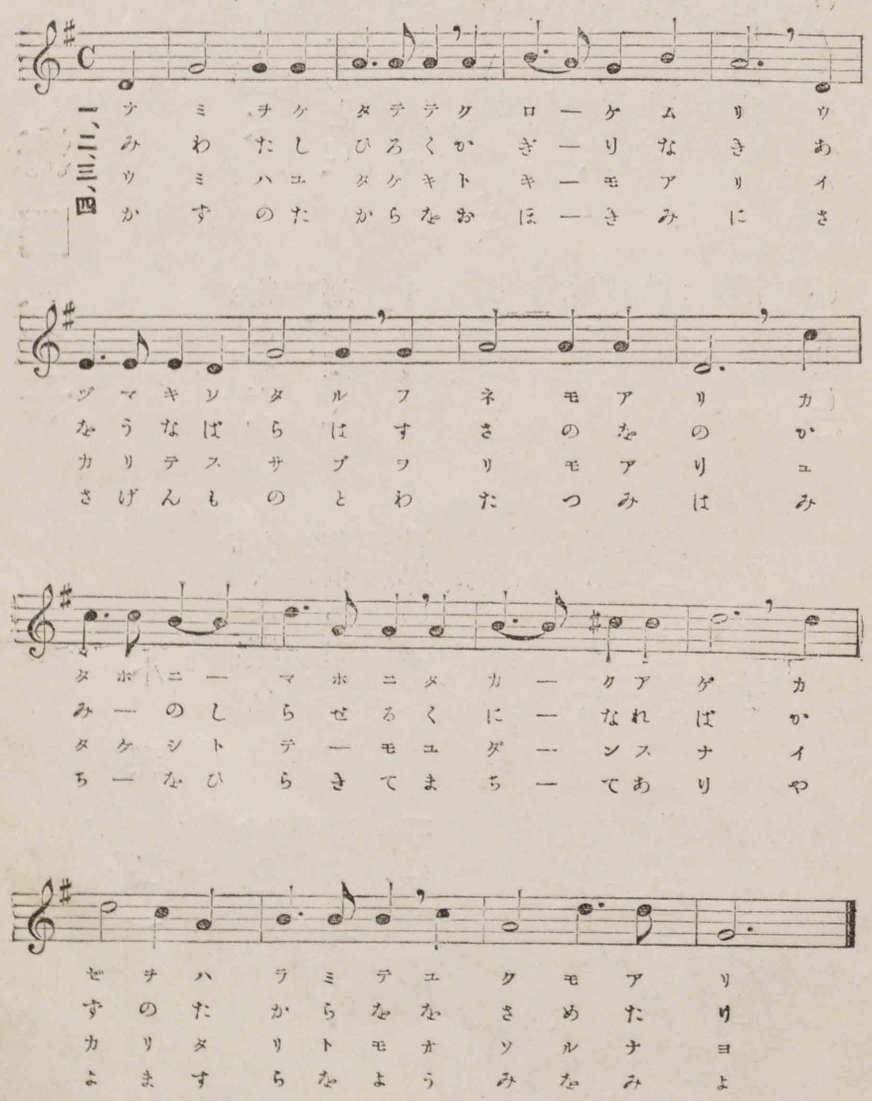
『青海原は、　すさのをの。
數の寶を、　藏めたり。

怒りてすさぶ、　をりもあり。
いかりたりとも、　おそるなよ。

さゝげんものと、　わたつみは。
やよますらをよ、　海を見よ。』

海

Moderato. ♩=100.



海國女子

小森松風

一、逆巻く涙を、物とせず。
故郷をあとに、海洋遠く。
まだ見ぬ國に、うち渡り。
ゆけ〳〵をみなご、いざ共に。』

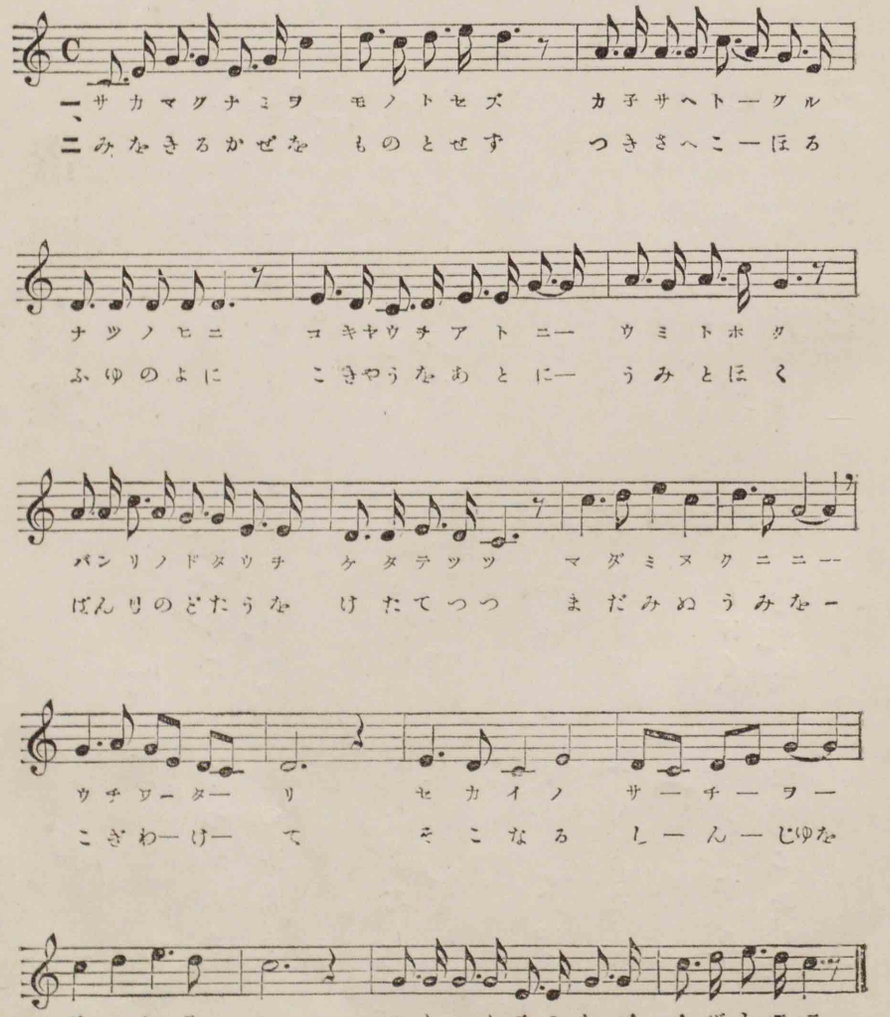
二、身をきる風を、物とせず。
故郷をあとに、海洋遠く。
まだ見ぬ洋を、漕分けて。
ゆけ〳〵をみなご、いざ共に。』

金さへ鑠る。夏の日に。
萬里の怒濤を、蹴立てつゝ。
世界の幸を、手に取らん。

月さへ凍る、冬の夜に。
萬里の怒濤を、蹴立てつゝ。
底なる眞珠を、あさらなん。

海國女子

Allegrezza. ♩=120.



帝國海軍

一、萬雷一時に、墜ちたりな。
敵の艦隊、碎きしも。
帝國海軍　萬々歳。』

二、時計の鍼の、たえ間なく。
さらばきのふに、いやまして。
帝國海軍　萬々歳。』

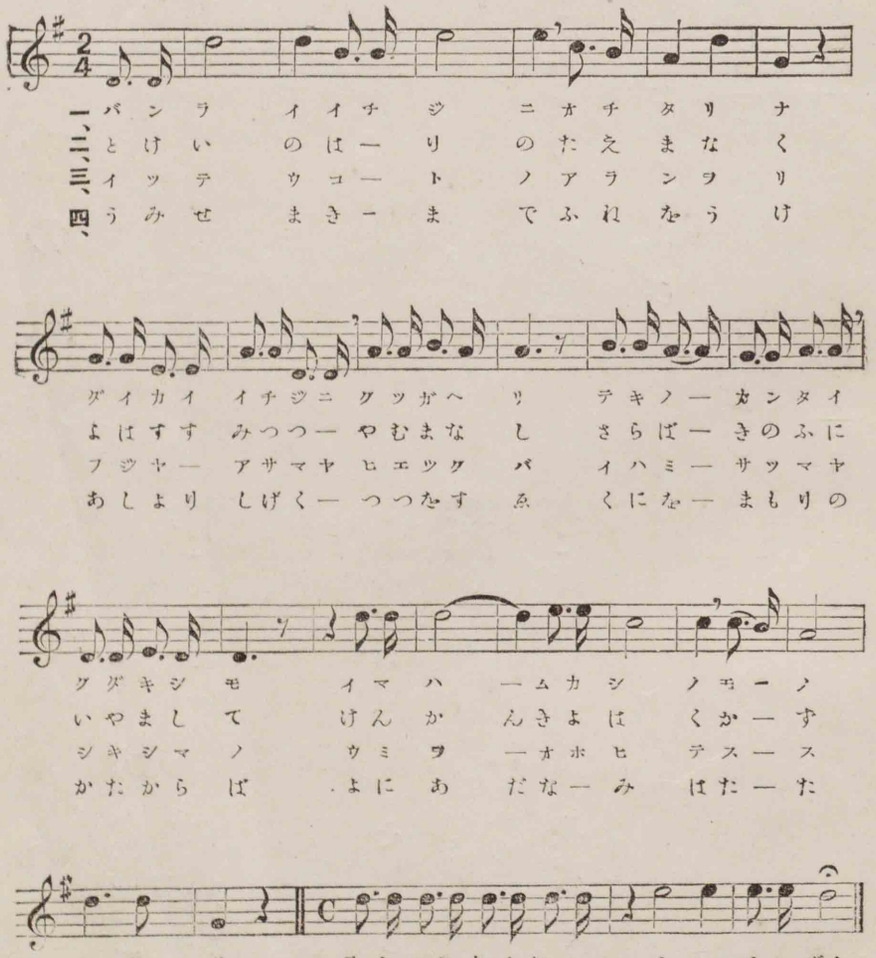
三、一朝事の、あらんをり。
石見薩摩や、敷島の。
帝國海軍　萬々歳。』

四、海せまきまで、船を浮け。
國をまもりの、かたからば。
帝國海軍　萬々歳。』

加部嚴夫

帝國海軍

Allegretto. ♩=120.



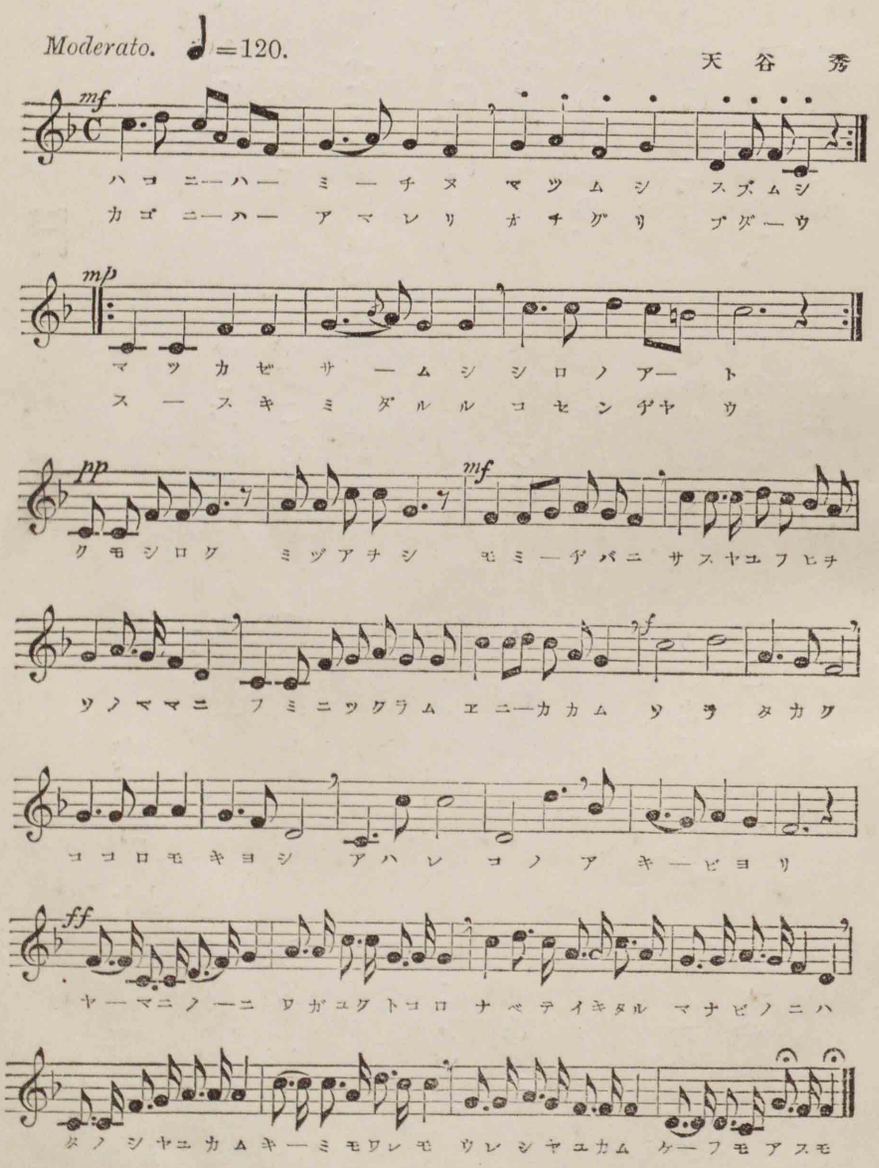
秋の散歩

棟方悌二

箱には滿ちぬ、　松蟲鈴蟲。　籠にはあまれり、　落栗葡萄。
松風寒し城の址、　薄みだるゝ、　古戰場。
雲白く、水青し、　紅葉ばに、　さすや夕日を、　そのまゝに。
文に作らむ、　畫にかゝむ、　空高く、　心も清し。
あはれこの、　秋日和、　山に野に、　我が行く所。
なべて活きたる、　學びの庭。
樂しや行かむ、　君も我も。
嬉しや行かむ　今日も明日も。』

秋の散歩

天谷秀



日光

旗野十一郎

一、山に水に、　あこがれて。
世の諺に、　いふごとく。
ふたらのやまの、　神の宮。』

二、春に秋に、　つねなれど。
東を照らす、　みやしろは。
いろ升形の、　花紅葉。

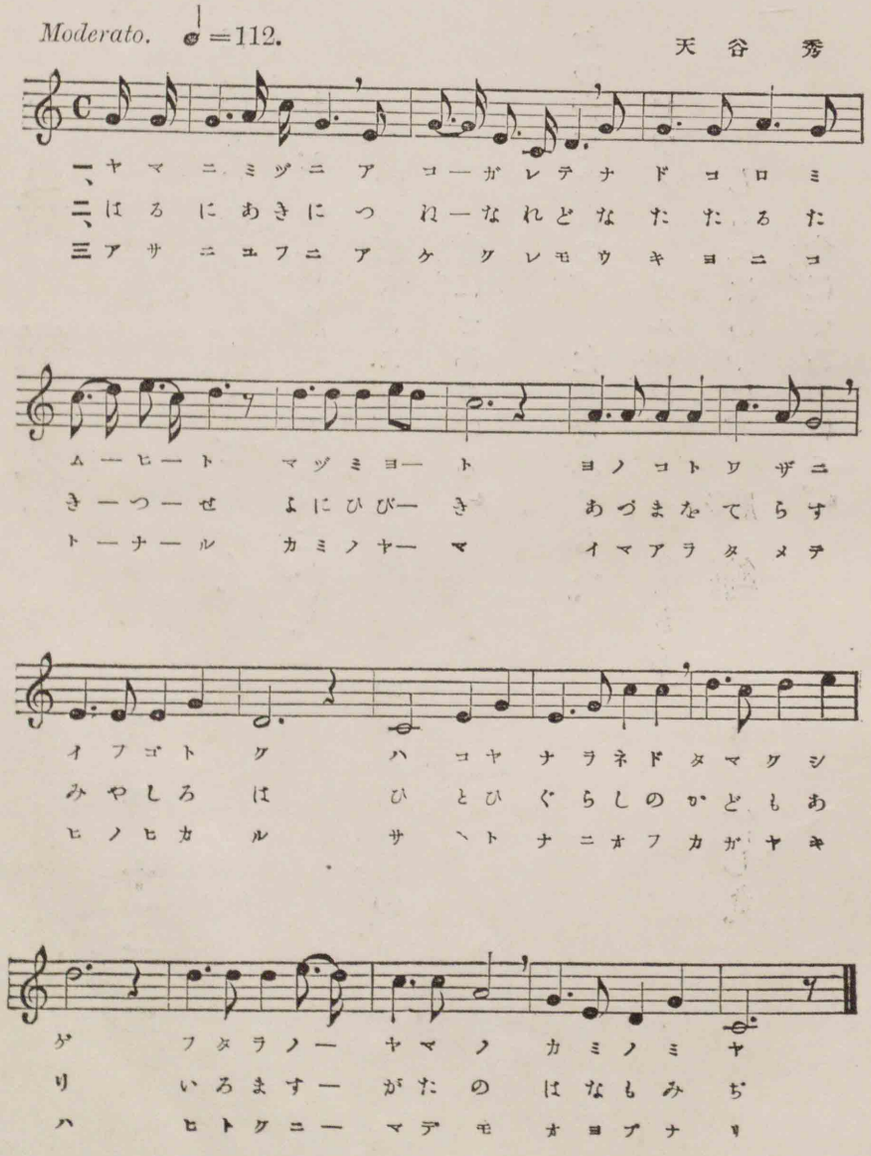
三、朝に夕に、　あけくれも。
今あらためて、　日の光る。
他國までも、　およぶなり。』

名所見む人、　まづみよと。
藐姑射ならねど、　玉くしげ。

名たゝる瀧津瀨、　世にひゞき
ひと日暮の、　門もあり。

うきよにことなる、　かみの山。
鄕と名に負ふ、　かゞやきは。

日光



音樂會

旗野十一郎

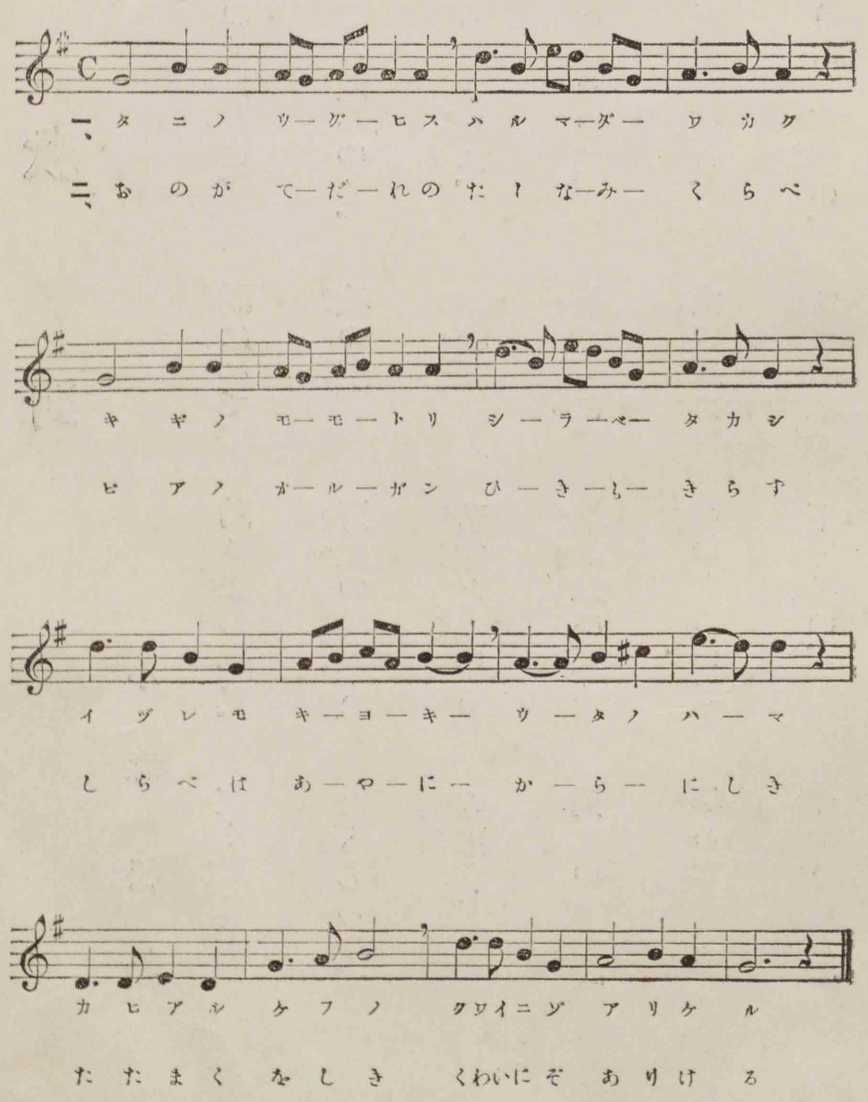
一、たにのうぐひす、春まだわかく。
　きゞの百鳥、しらべたかし。
　いづれもきよき、歌の濱、かひある今日の。
　會にぞありける。』

二、おのがてだれの、たしなみくらべ。
　ピアノ、オルガン、ひきもきらず。
　しらべはあやに、唐錦。たゝまく惜しき。
　會にぞありける。』

音樂會

内田榮太郎

Andante. ♩=96.



秋　野

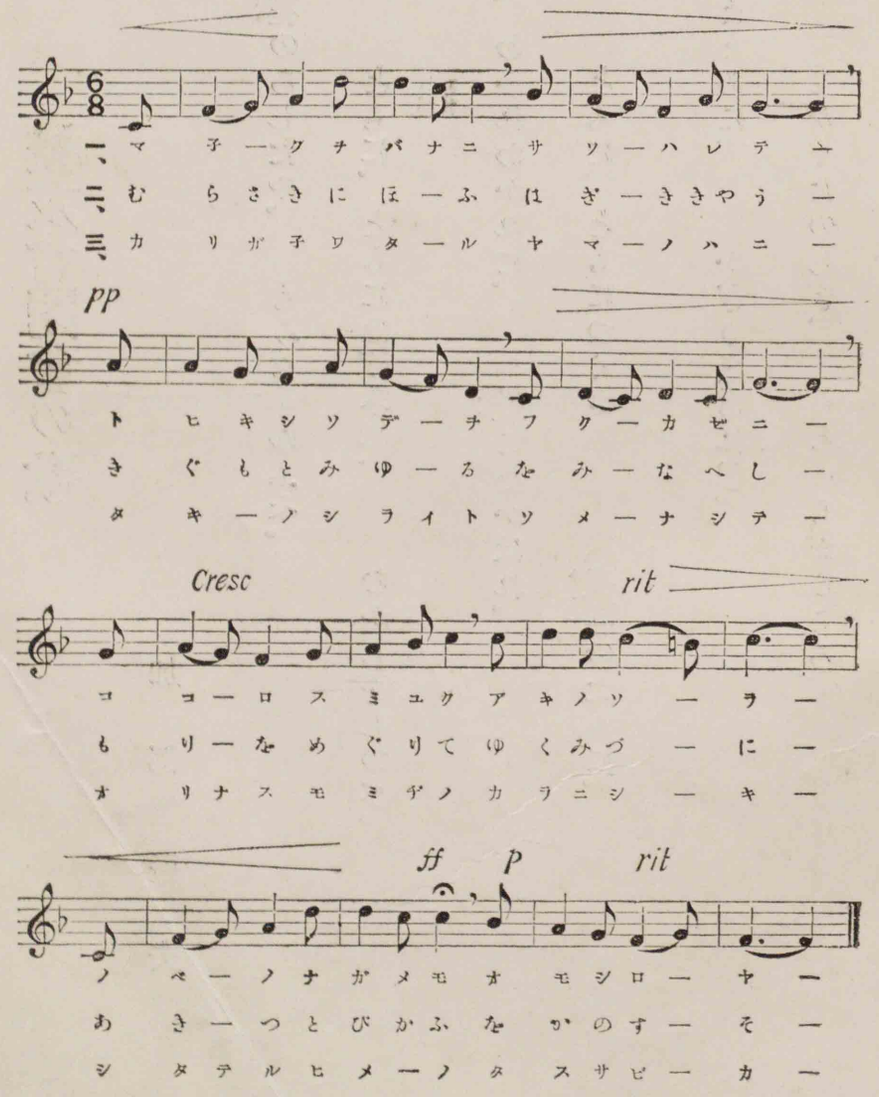
小森松風

一、まねく尾花に、　誘はれて、
　こころ澄みゆく、　秋の空。
二、むらさき匂ふ、　萩桔梗。
　森をめぐりて、　行く水に。
三、かりがね渡る、　山の端に。
　織りなす紅葉の、　唐錦。

訪ひ來し袖を、　吹く風に。
野邊の眺望も、　おもしろや。』
黄雲と見ゆる、　女郎花。
蜻蛉飛び交ふ、　岡の裾。』
瀧のしらいと、　染めなして。
下照姫の、　手すさびか。』

秋　野

Moderato. ♩=108.　　天谷秀

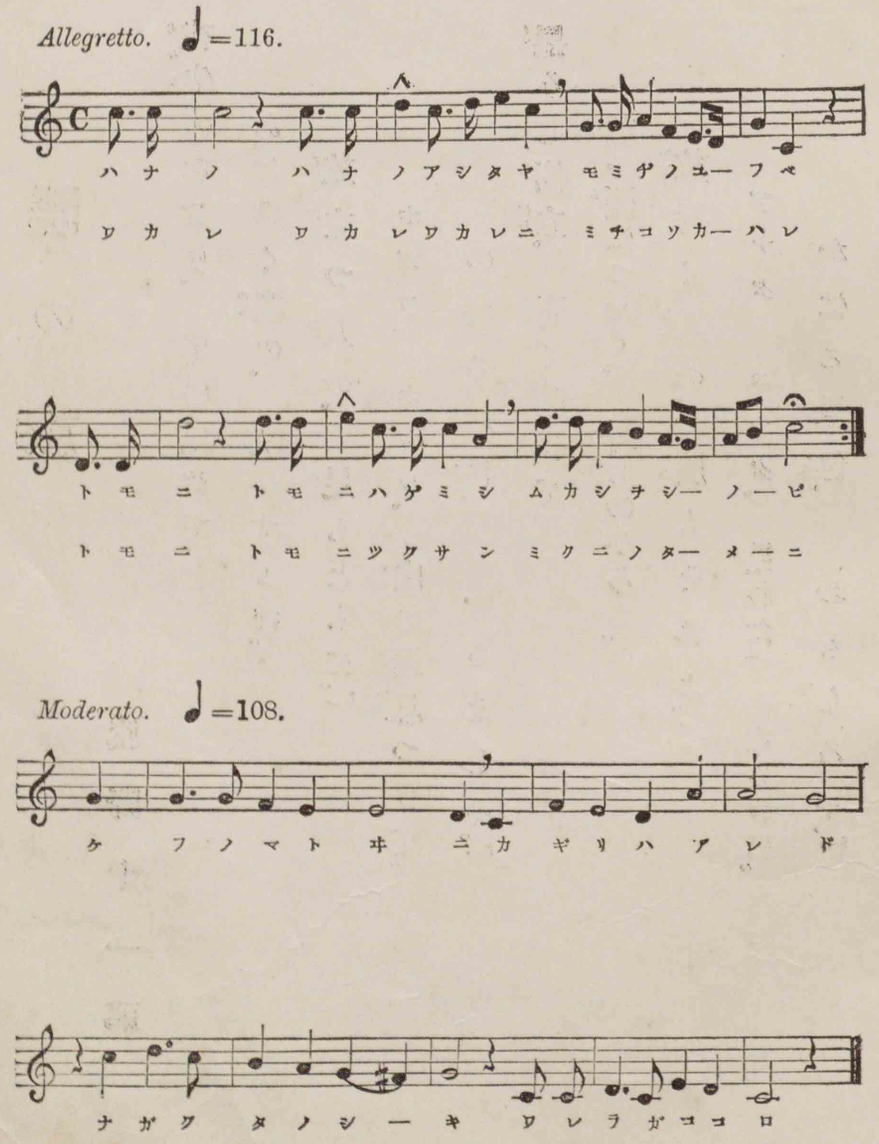


校友會閉會の歌

加部嚴夫

花の、花のあしたや、　もみぢのゆふべ。
　ともに、ともにはげみし、　むかしをしのび。
わかれ、わかれわかれに、　道こそかはれ。
　ともに、ともにつくさん。　皇國のために。
けふのまとゐに、　かぎりはあれど。
　ながくたのしき、　われらがこころ。

校友會閉會の歌



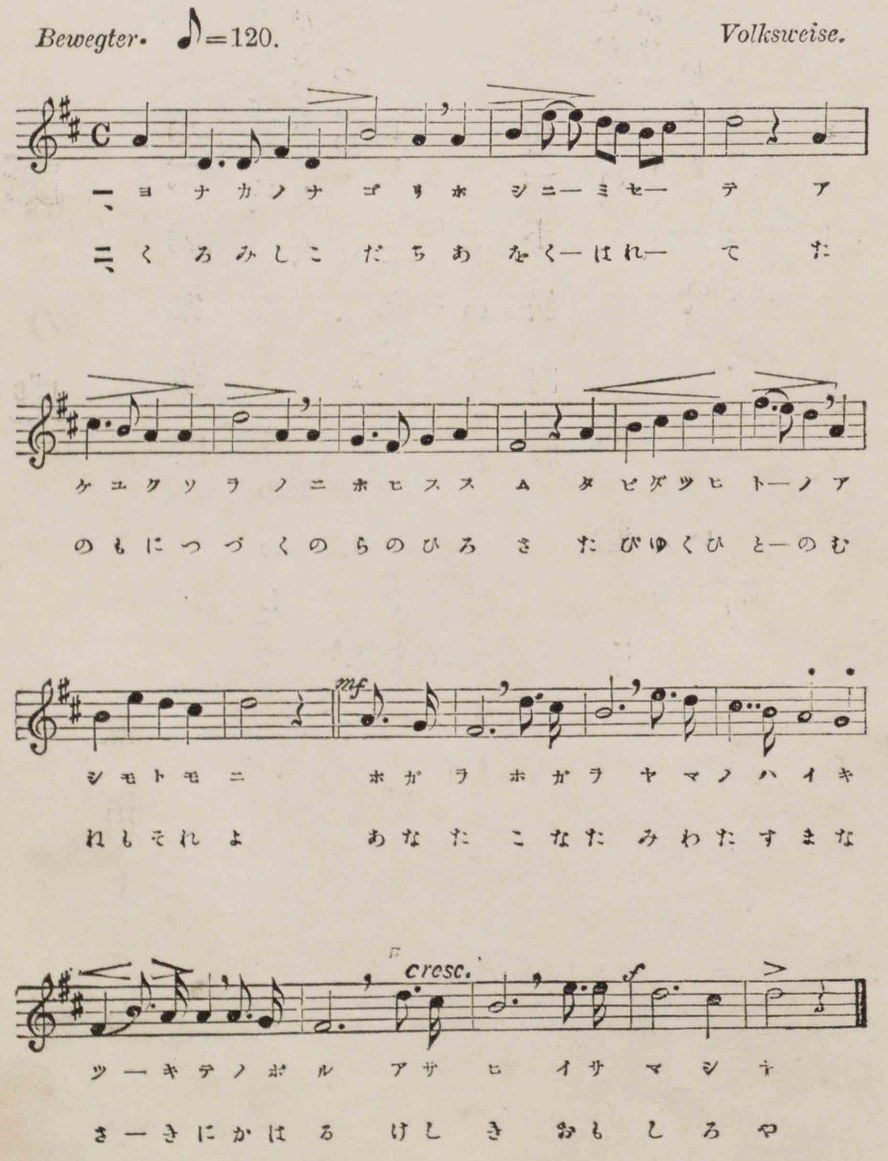
曉の旅

旗野十一郎

一、夜半のなごり、星に見せて。
あけゆく空の、映ひすゝむ。
旅立つ人の、足もともに。」
ホガラ ホガラ、山の端息つきて。
のぼる旭日、いさましや。』

二、黑みし樹立、青く晴れて。
田の面につゞく、野らのひろさ。
旅行く人の、胸もそれよ。」
アナタ コナタ、見わたすまなさきに。
かはる景色、おもしろや。』

曉の旅



詠史

三田葆光

第一、義家朝臣

よるの大殿に、
ひきならしたる、
つるのおとにも、
御腦をこそは、
そのあづさ弓、
よるのまもりと、

とのゐして。
梓大君の。
やすめけれ。
御枕の。
なりにけり。

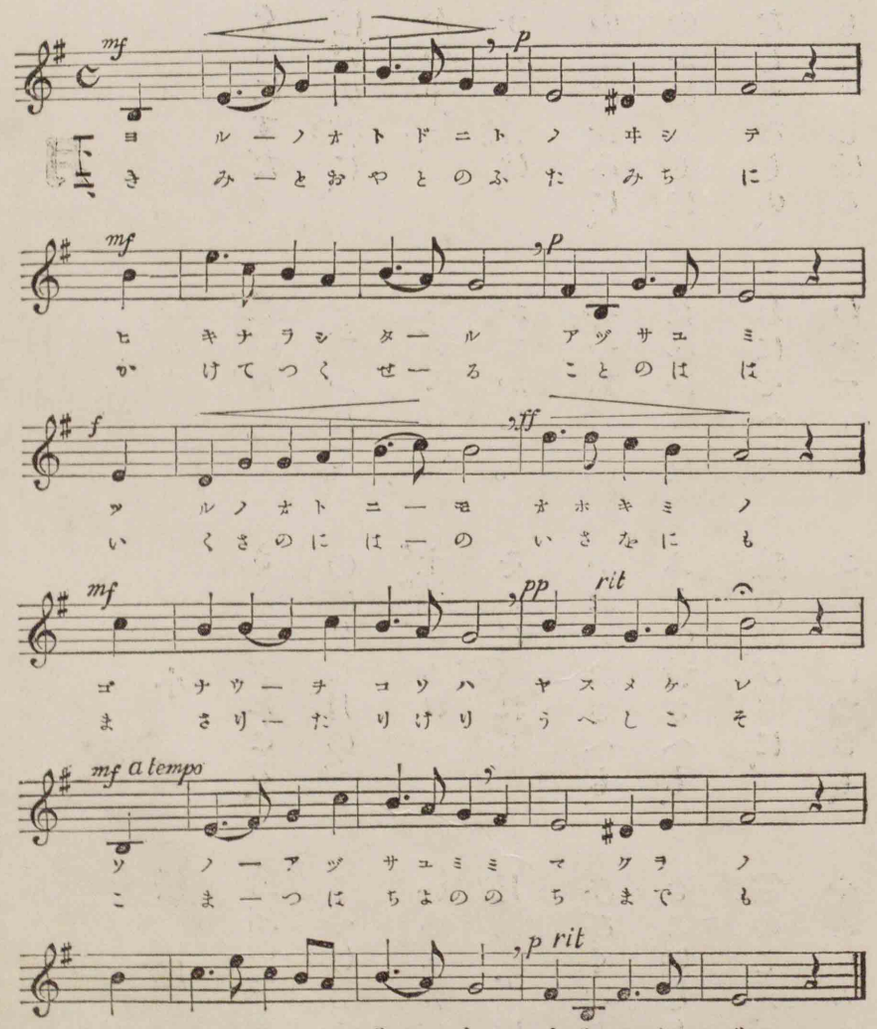
第二、小松内府

君とおやとの、
かけてつくせる、
いくさの塲の、
まさりたりけり、
小松は千代の、
畏き例に、

兩道のことのは。
いさをにも。
諾こそ。
のちまでも。
曳れけれ。

詠史

金須嘉之進

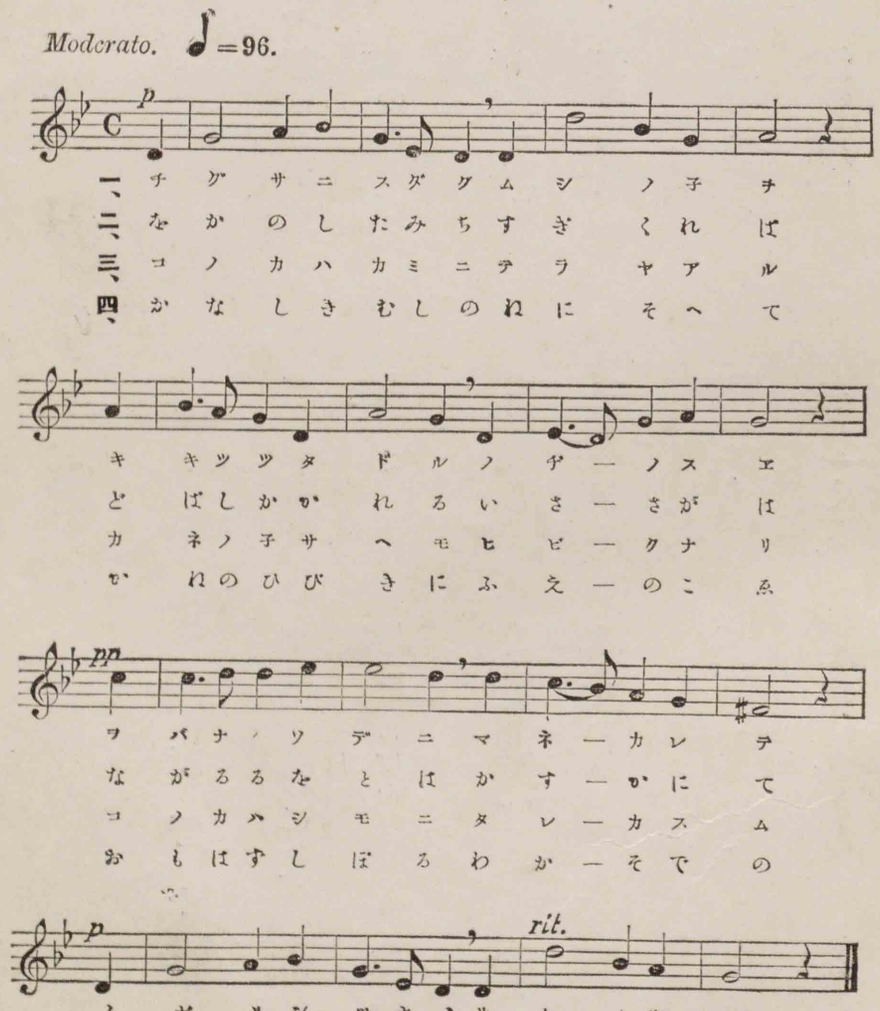


月

一、ちぐさにすだく、　蟲の音を。　きゝつゝたどる、　野路のすゑ。
をばなの袖に、　まねかれて。　のぼりし月の、　さやけさよ。』
二、をかの下道、　すぎくれば。　土橋かゝれる、　いさゝがは。
ながるゝ音は、　かすかにて。　そこに宿れる、　月のかげ。『
三、このかはかみに、　寺やある。　かねのねさへも、　ひびくなり。
このかはしもに、　たれかすむ。　ふえの音さへも、　きこゆなり。』
四、かなしきむしの、　ねにそへて。　鐘のひびきに、　笛のこゑ。
おもはずしぼる、　わがそでの。　なみだにつきも、　やどれるか。』

小森松風

月



窓の小鳥

旗野十一郎

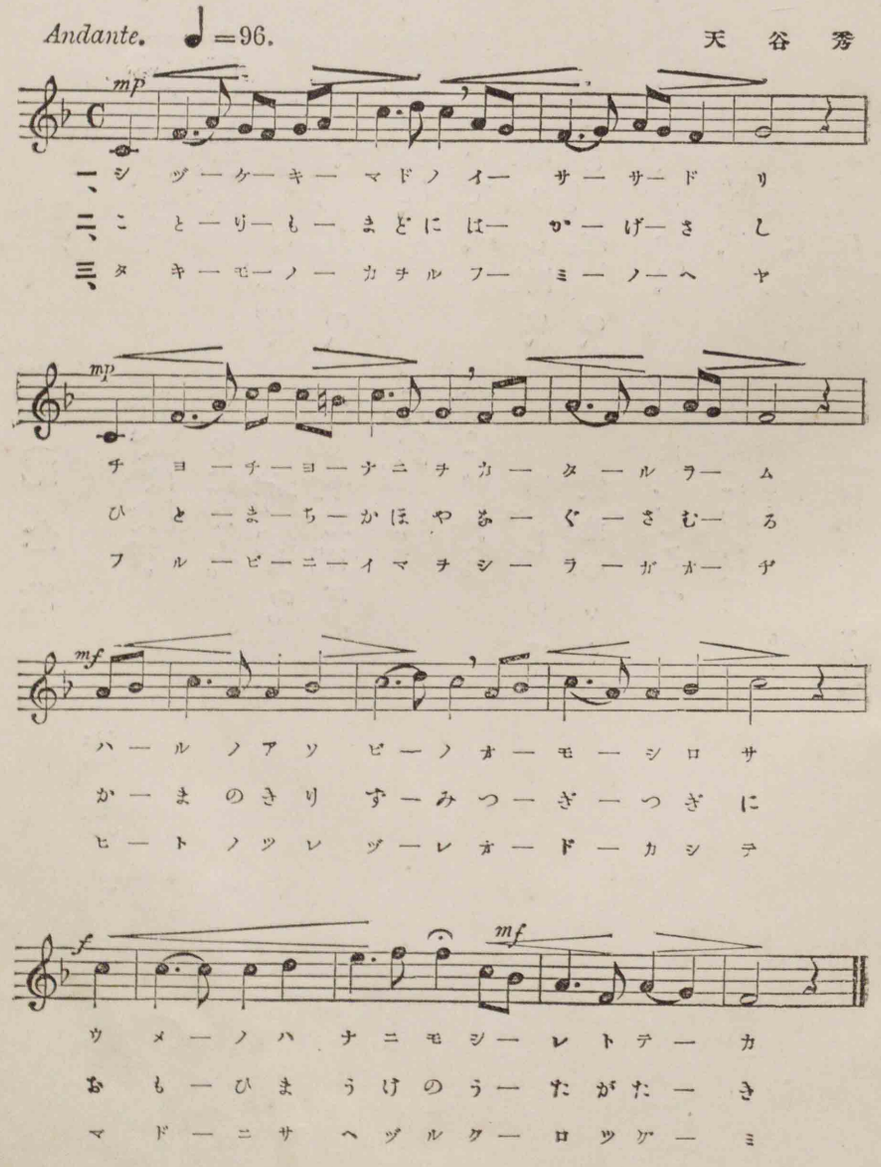
一、靜けき窓の、　いさゝどり。　チヨチヨなにを、　語るらむ。
春のあそびの、　面白さ。　梅の花にも、　知れとてか。』

二、小鳥も窓に、　羽影さし。　人待がほや、　慰むる。
釜の切炭、　つぎつぎに。　思ひ設の、　歌對手。』

三、薫物かをる、　書齋。　古風に今を、　白髮翁。
他の徒然、　おどかして。　窓に囀る、　黑鶫。』

窓の小鳥

天谷秀



建　都（紀念歌）

旗野十一郎

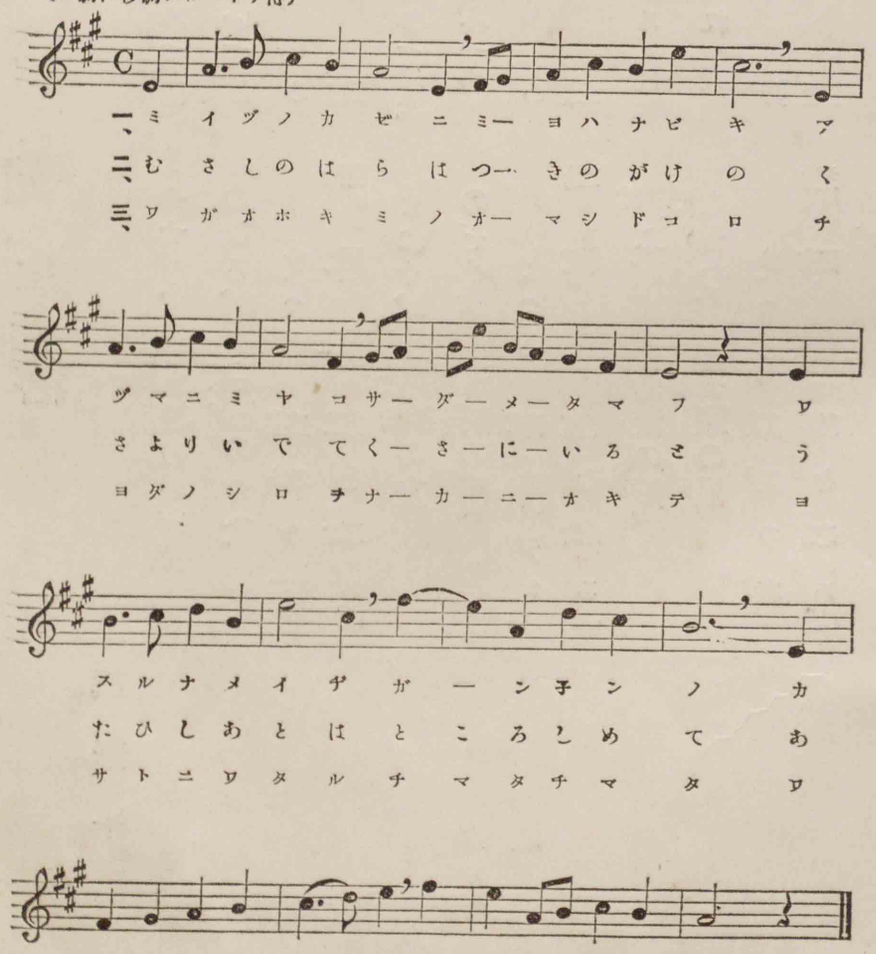
一、御威光の風に、御世は靡き。
東國に帝都、定めたまふ。
忘るな明治、元年の。
十月の、十三日ぞ。』

二、武藏の原は、月の影の。
草よりいでゝ、草にいると。
歌ひし跡は、所しめて。
蒼生の、家並つゞく。』

三、わがおほきみの、おましどころ。
千代田の城を、中央におきて。
四里に度る、街衢。
わがおほきみの、おましどころ。』

建　都

Moderato. ♩=108.
（ニ調に移調スルコトヲ得）



海水浴

旗野十一郎

一、あみては、　やすむ、　青松のかげ。
　あいては。　ねむる、　白砂のうへ。
　　み　ず、(みず)　塵　都の夢。
　　三　週　間、　家を　忘る。『

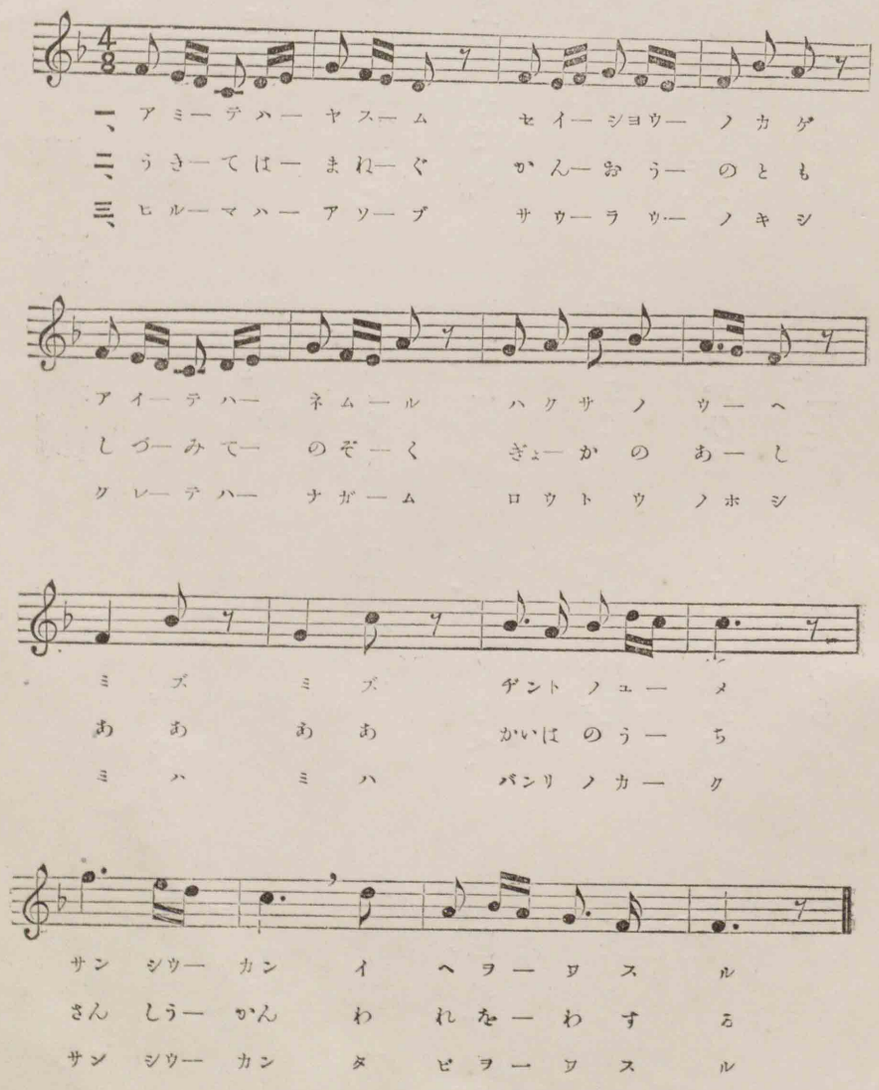
二、浮きては、　まねぐ、　閑鷗の友。
　沈みて、　のぞく、　漁舸の脚。
　　あ　し、(あし)　海波のうち。
　　三　週　間、　吾を　忘る。『

三、ひるまは、　遊ぶ、　滄浪の岸。
　くれては、　ながむ、　樓頭の星。
　　身　は、(身は)　萬　里の　客。
　　三　週　間、　旅を　忘る。『

海水浴

岡野貞一

♪=120.



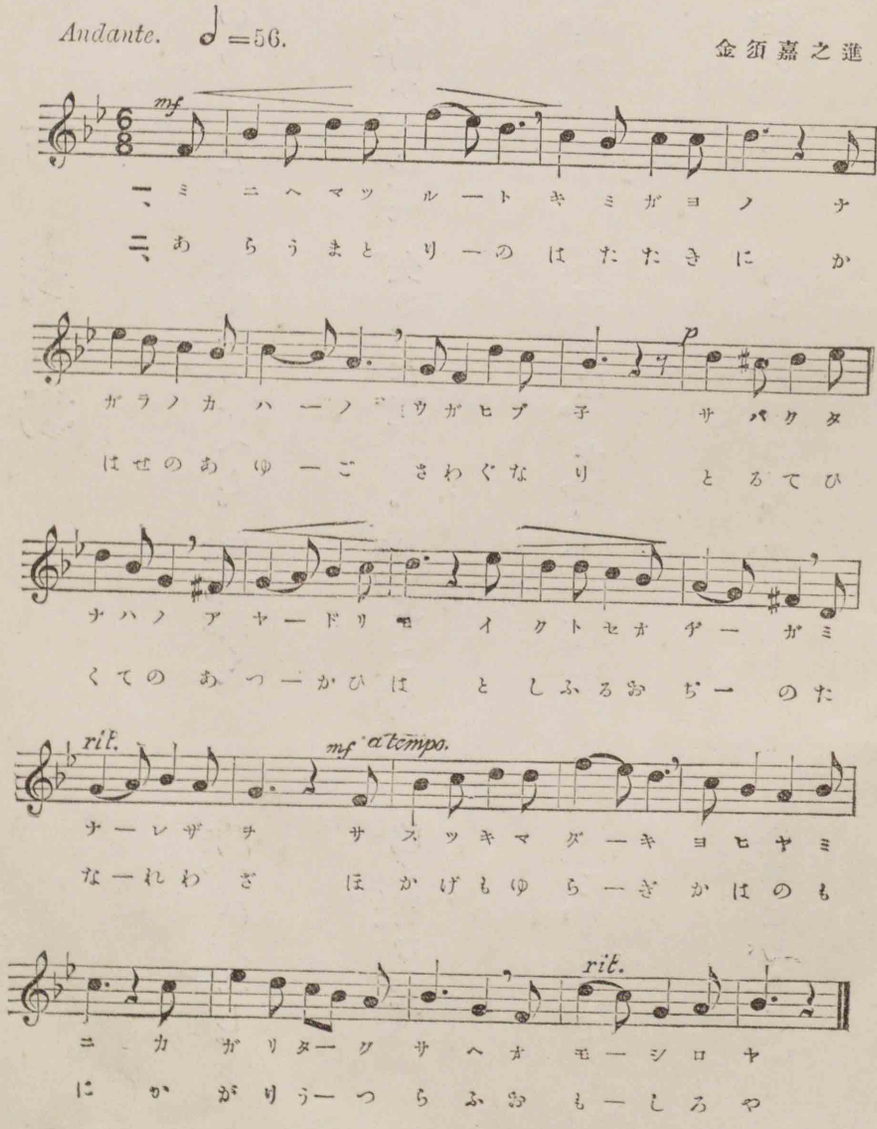
長良河の鵜飼

旗野十一郎

一、御贄奉ると、　君が代の。　ながらの川の、　うがひ舟。
さばく手繩の、　あやどりも。　幾年翁が、　みなれ棹。
さす月まだき、　宵闇に。　篝火たくさへ、　面白や。』

二、新鵜熟鵜の、　羽鼓きに。　河瀬の鮎兒、　騒ぐなり。
とる手曳く手の、　あつかひは。　としふるおぢの、　手煉業。
火影もゆらぎ、　川の面に。　篝火うつらふ、　面白や。』

長良河の鵜飼



古戰場

一、松のあらしに、軍旗ひるがへし。勝哄高く、駒追ひ入れし。

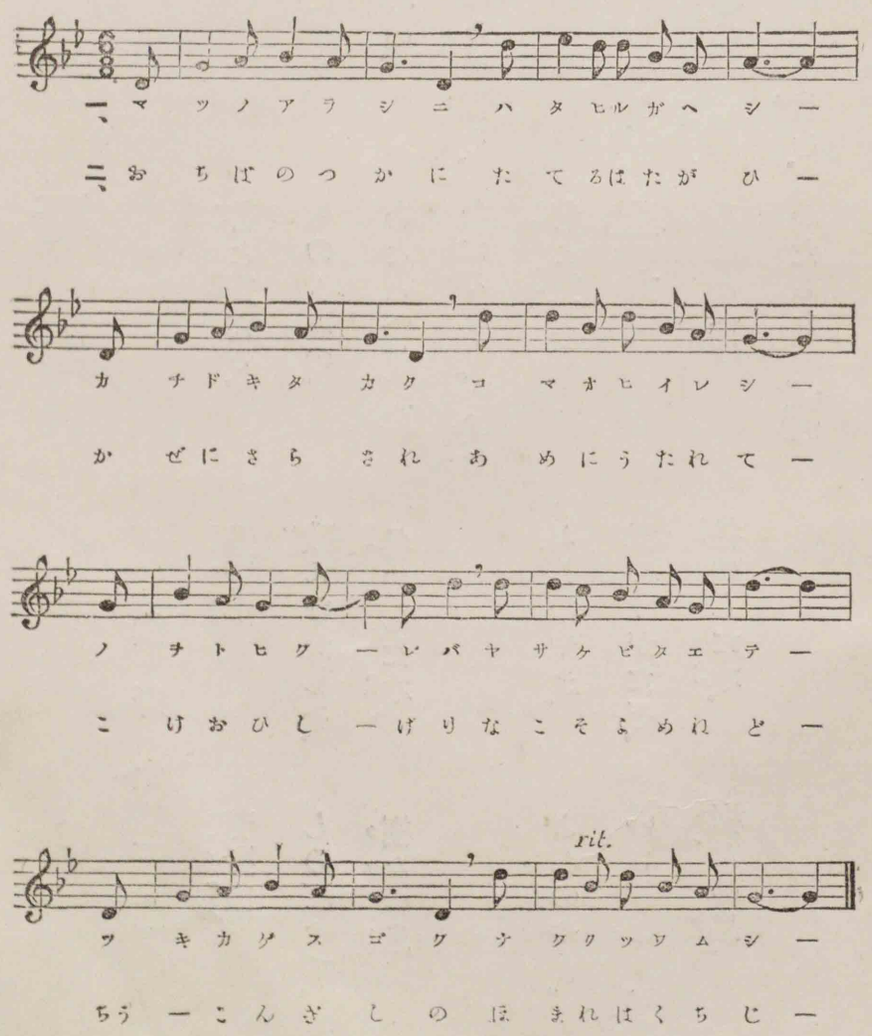
野を訪ひ來れば、矢さけび絶えて。月影すごく、鳴く轡むし。』

二、落葉の墳に、建てるは誰が碑。風に晒れ、雨に打たれて。

苔生ひ茂り、名こそ讀めねど。忠魂義士の、榮譽は朽ちじ。』

古戰場

Andante. ♪=96.　　天谷秀



芳野山

旗野十一郎

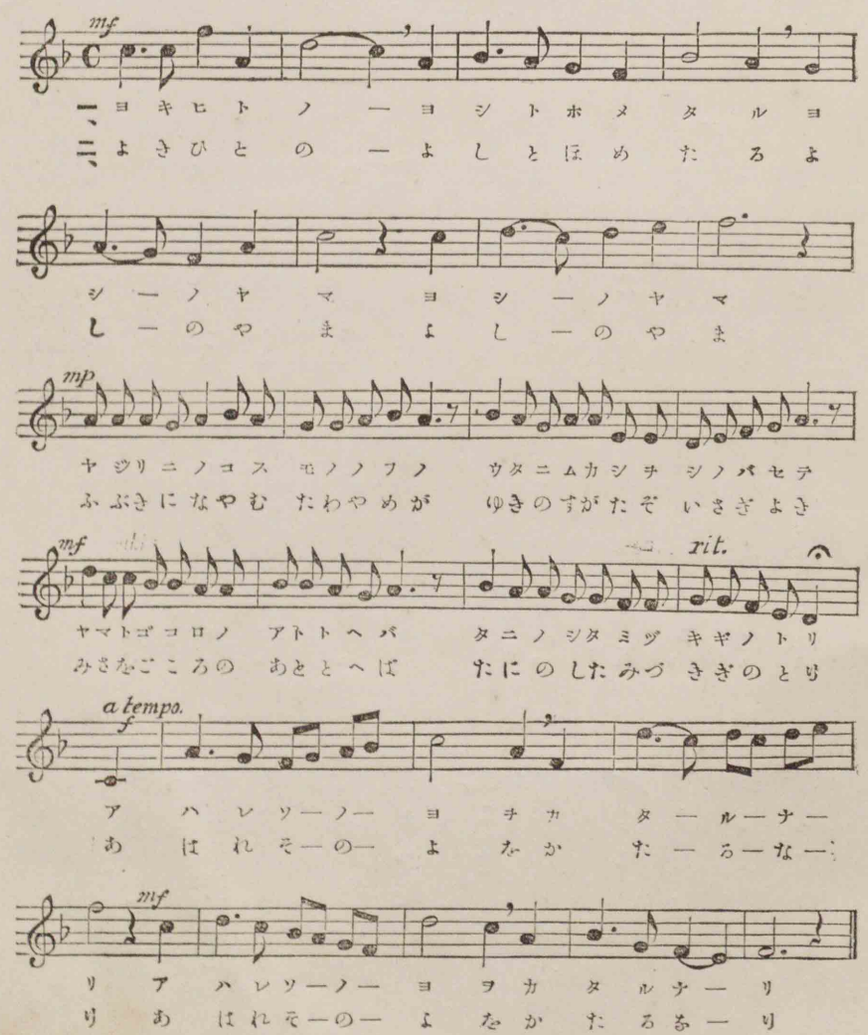
一、淑人の、　善と賞たる、
鏃尻に遺す、　ものゝふの。
大和心の、　あととへば。
『あはれその世を、　かたるなり。』（復唱）

二、淑人の、　よしのやま、
吹雪になやむ、　雪のすがたぞ、
貞操心の、　いさぎよき。
『あはれその世を、　かたるなり。』（復唱）

芳野山。　芳野山。
歌にむかしを、　しのばせて。
谷のした水、　樹々の鳥。
よしのやま。
谷のした水、
樹々の鳥。

芳野山

Moderato. ♩=108.　　楠美恩三郎



薩摩守忠度

林　森太郎

一、壽永の秋の、木枯に。
西海遠く、迷ひゆく。

二、世の雲行も、たゞならず。
五條三位の、門前に、

三、屍を山に、さらすとも、
更に厭はぬ、忠度が。

四、こたびの集に、一首だに。
草葉のかげの、よろこびに。

五、さぐり出せる、一卷を。
ふけ行く月の、影さして。

昔の榮華、夢と消え。
平家の末ぞ、あはれなる。』

ましていぶせき、夜半の空。
薩摩守は、引きかへし。』

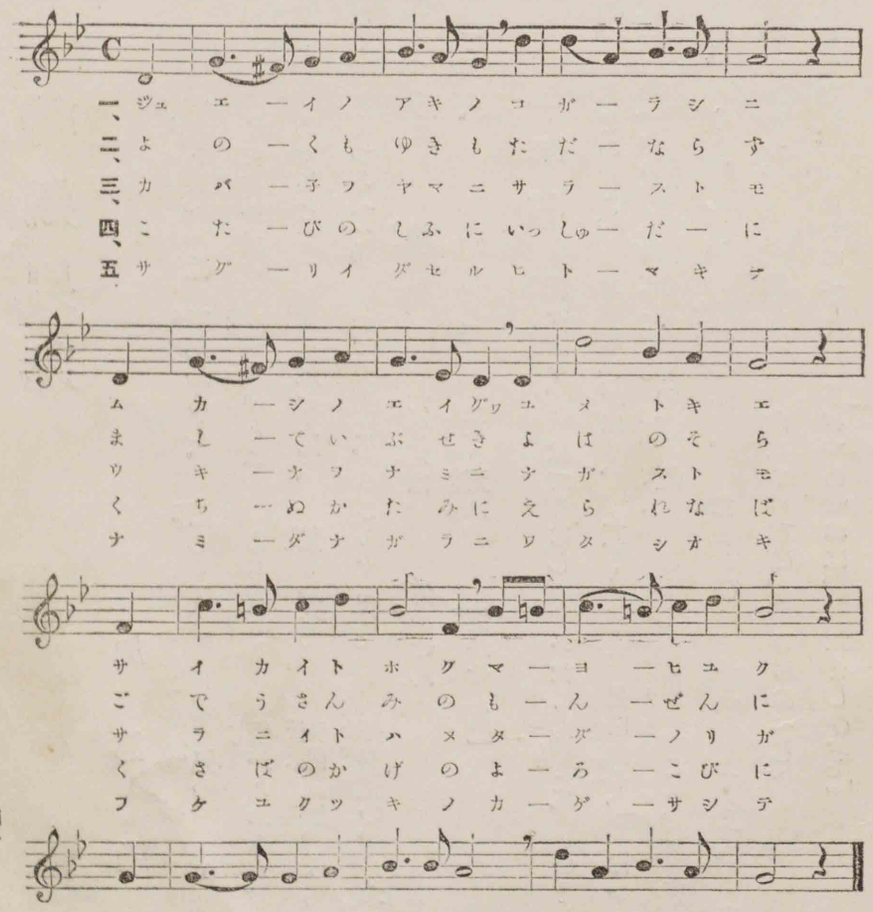
うき名を、波に流すとも。
これや限りの、面に。』

朽ちぬ形見に、撰られなば。
後の守りと、なりなむと。』

涙ながらに、わたし置き。
さ霧にまぎれ、落ちてゆく。』

薩摩守忠度

Mesto. ♩=92.　　天谷　秀



神州男兒

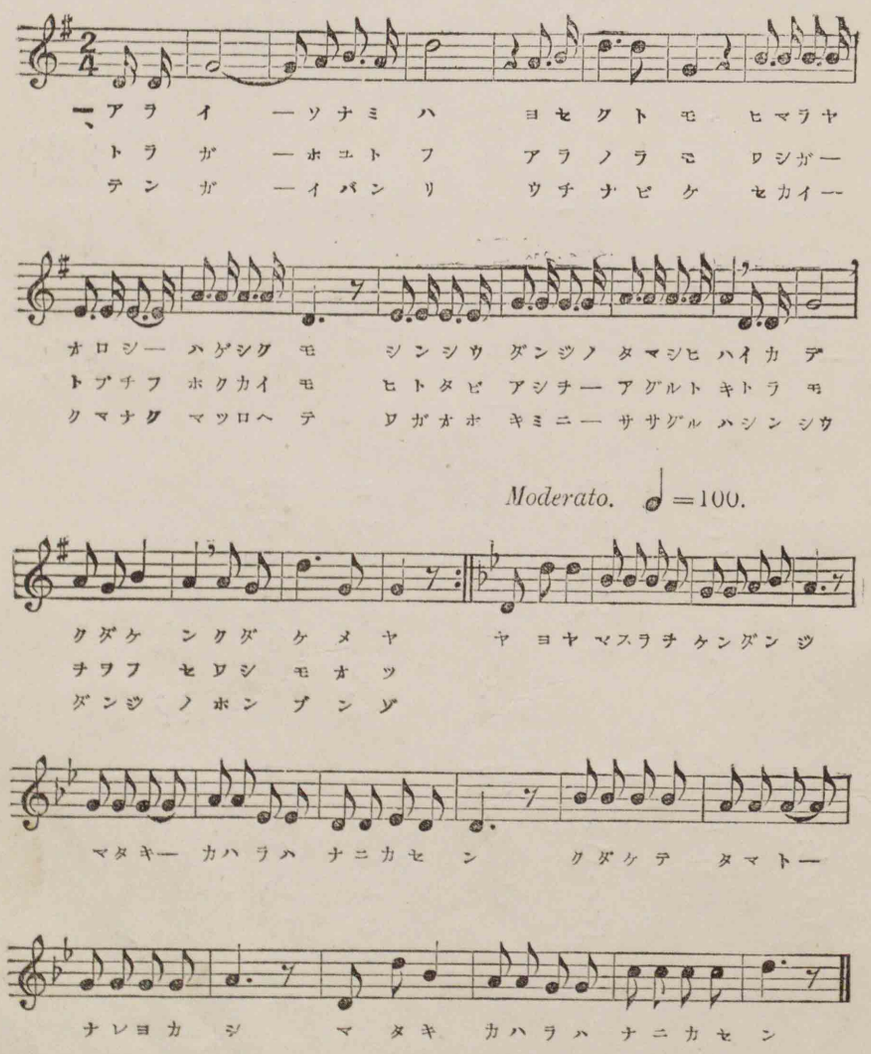
加部嚴夫

一、荒磯浪は、　よせ來とも。　比嶋羅那おろし、　烈しくも。　神州男兒の、　たましひは。
いかで碎けん、　くだけめや。　虎が吼ゆとふ、　あら野らも。　鷲がとぶちふ、北海も。
ひとたび足を、　あぐるとき。　虎も尾をふせ、　鷲もおつ。　天涯萬里、うちなびけ。
世界くまなく、　まつろへて。　わが天皇に、　さゝぐるは。　神州男兒の、　本分ぞ。
やよやますらを、　健男兒、　またき瓦は、　何かせん。
くだけて玉と、　なれよかし。　またき瓦は、　何かせん。』

二、太平洋や、太西洋。　洋々渺々、　はてもなし。　いたらん國に、　いそしみて。
神州男兒の、　名をあげよ。　ありなれがはも、　ふかゝらず。　長白山も、　たかゝらず。
吉林春寳、　西比里亞も。　今は皇國の、　垣内なり。　黑雲おこり、風すさび。
雷とゞろきて、　くらけれど。　神州男兒の、　たましひは。やみをもてらす、　光あり。
ゆけやすゝめや、　健男兒。　山はさけなば、　さけぬべし。
海はあせなば、　あせぬべし。　さけずあせぬは、　たましひぞ。』

神州男兒

Allegretto Scherzando ♩=120



落機山吹雪

旗野十一郎

一、雪げの風は、　吹きすさみ。
世は白妙に、　包まれし。

二、ただ往くものは、レンジール(鹿馴)
白銀の山、　前に置き。

三、見わたす峰も、　野も河も、
ロッキー山の、　朝ふぶき。

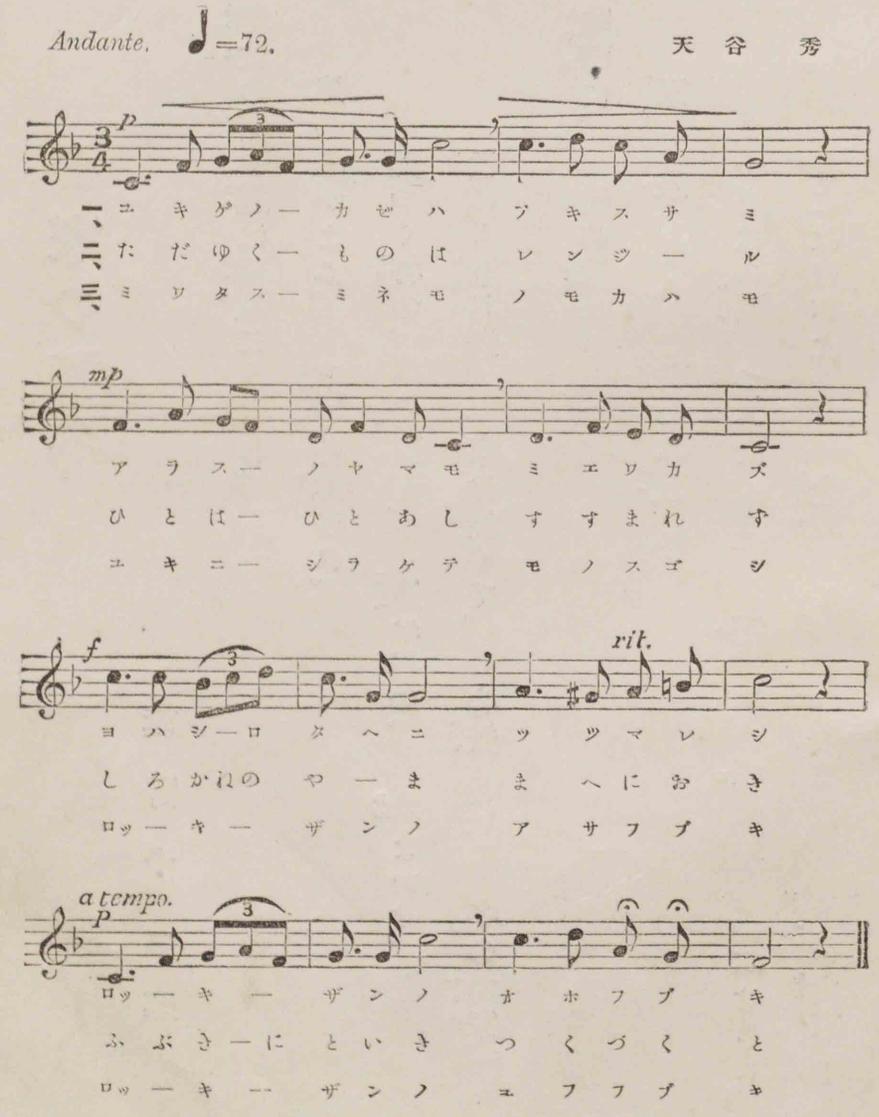
荒す野山も、　見えわかず。
ロッキー山の、　おほふぶき。』

人はひとあし、　進まれず。
吹雪に太息、　つくづくと。』

雪にしらけて、　物凄し。
ロッキー山の、　夕ふぶき。』

ロッキー山吹雪

天谷秀



山家の初冬

旗野十一郎

一、浮世の、　道は落葉にうもれ。
　風のみかよふ、　跡こそ見ゆれ。
　粟つく杵の、　音信も。　應は谷の、　水まかせ。
　世にも五月蠅、　事は無くて。　心安きは、　冬の山家。』

二、時雨に、　柴の扉はさしぬ。
　凩　鼓　く、　音のみ殘し。
　のきばの薪、つみなくて。　圍爐裏の榾柴の。　いぶせきも。
　身にはけぶたき、　念知らで。　心安きは、　冬の山家。』

山家の初冬

楠美恩三郎

Moderato. ♩=120

一、ウキヨノ　ミチハオチバニ　ウモレ
二、しぐれに　しばのさぼそは　さしぬ

カゼノミ　カヨフ　アトコソミユレ
こからし　たたく　おとのみのこし

アハツク　キネノ　オトヅレモ
のきばの　たきぎ　つみなくて

コダヘハ　タニノ　ミヅマカセヨ
ぬろりの　ほだの　いぶせきも

ニモウルサキコト　ハナクテコ
にはけぶたき　おもひしらで

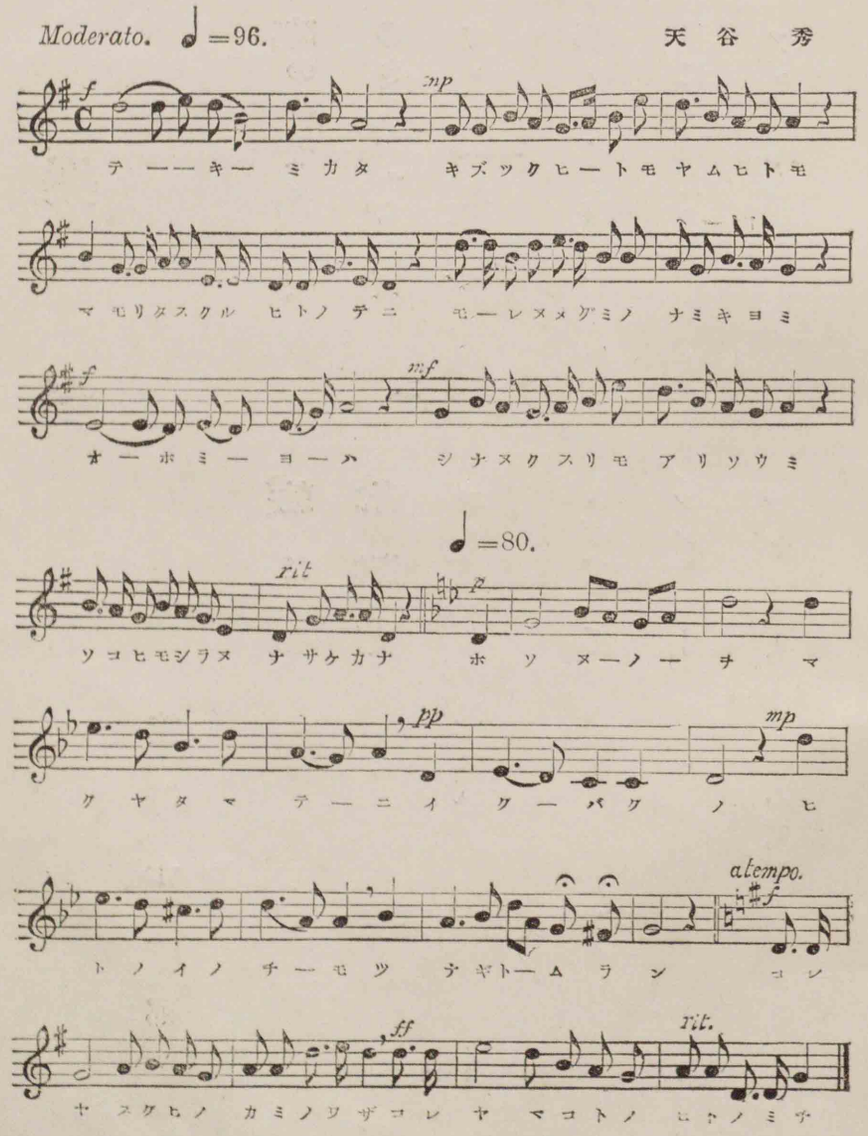
コロヤスキ　ハフユノヤマガ
ころやすき　はふゆのやまが

惠の波（看護婦）

下田歌子

敵味方、　傷く人も、　病む人も。
看護り助くる、　人の手に、　洩れぬ惠の、　波清み。
大御代は、　死なぬ藥も、　ありそ海。
底ひも知らぬ、　情かな。
細布を卷くや玉手に。　幾ばくの。
人の命も、　繋ぎとむらん。
　これや救の、　神のわざ。
これや誠の、　人の道。

惠の波



聖樂

旗野十一郎

一、時のみかど(自河天皇)の、
ゆきてかへらぬ、
ア、、樂も聖也、

二、時のみかど(拿帝)を、
世には出ださぬ、
ア、、樂も聖也、

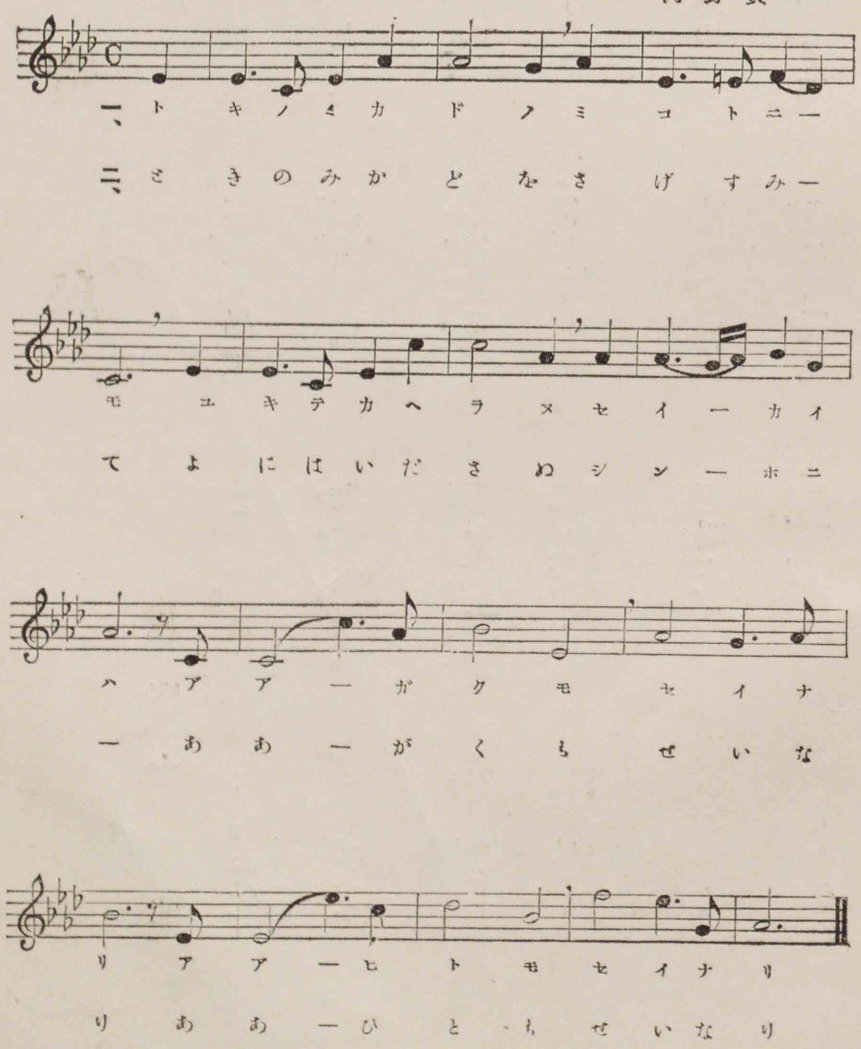
勅にも。
青海波。
ア、、人も聖也。『(樂人時資)』

さげすみて。
シンホニー。
ア、、人も聖也。『(ビートーヴェン)』

聖樂

岡野貞一

Maestoso. ♩=60.



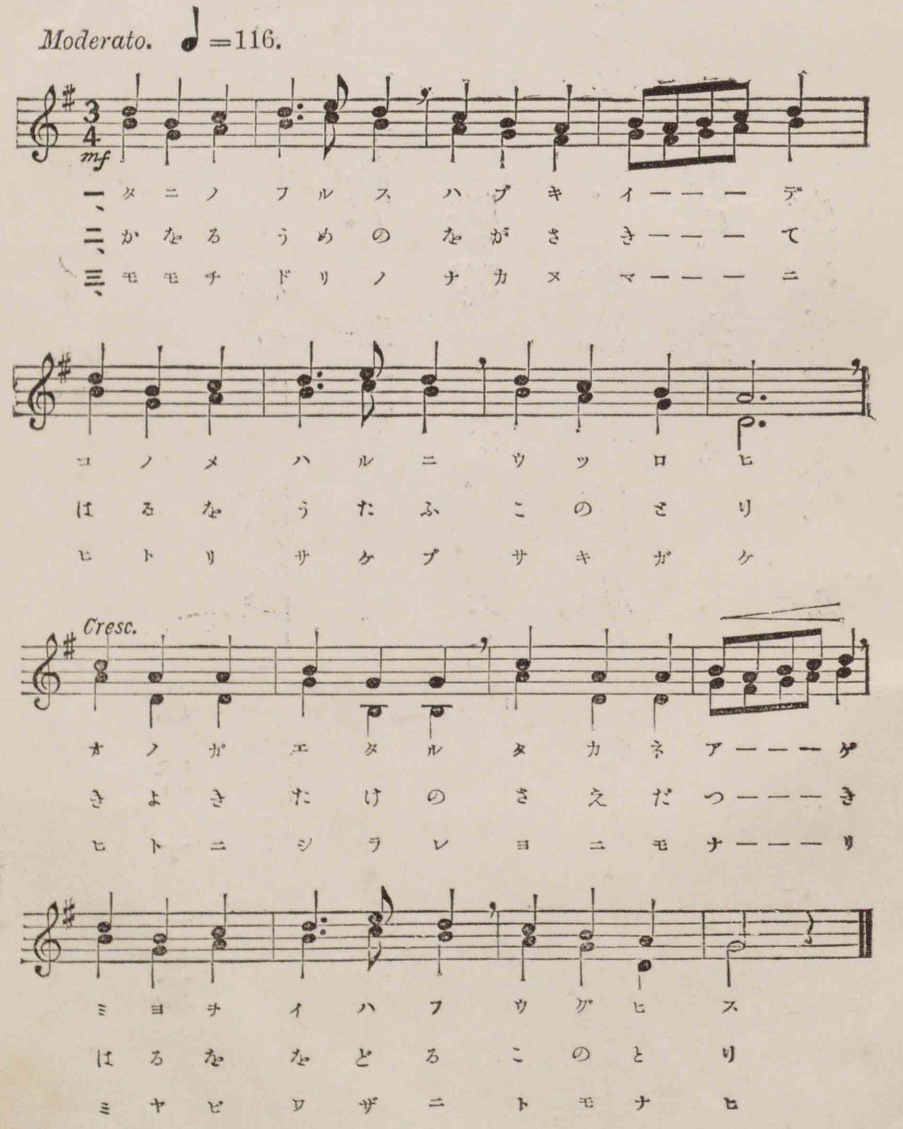
黄　鳥

旗野十一郎

一、谷の古巣、　羽振き出で。
自が得たる、　高音あげ。
二、薫る梅の、　小笠被て。
清き竹の、　小枝杖き。
三、百千鳥の、　啼かぬ間に。
人に知られ、　世にも鳴り。

このめ春に、　うつろひ。
御代を祝ふ、　うぐひす。』
春を歌ふ。　斯鳥。
春を躍る、　斯鳥。』
獨叫ぶ、　さきがけ。
風雅業に、　ともなひ。

黄　鳥



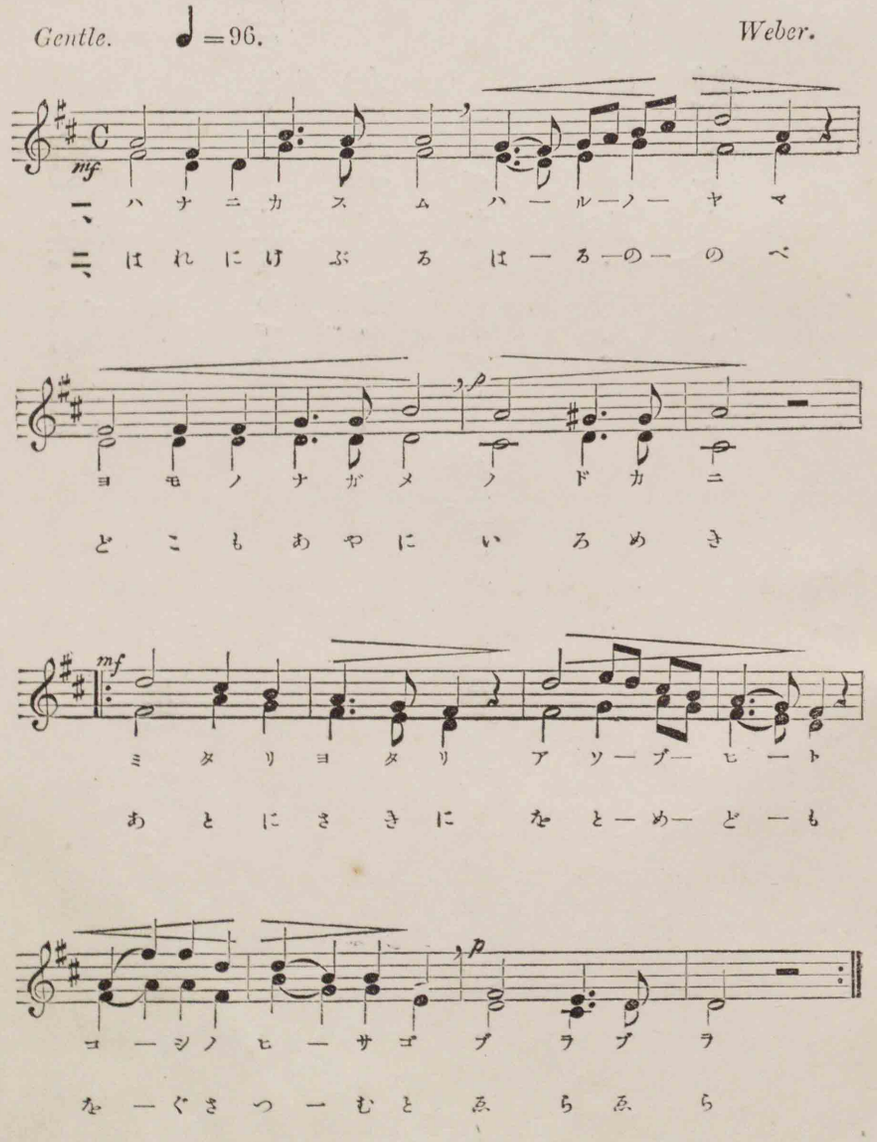
春の歌

旗野十一郎

一、はなにかすむ、春の山。四方の眺望、長閑に。
『三人四人、遊ぶひと。
腰の瓢、ぶら、ぶら。』（唱復）

二、はれにけぶる、春の野邊。何處も綾に、色めき。
『後に先に、少女ども。
小草摘むと、ふら、ふら。』（唱復）

春の歌



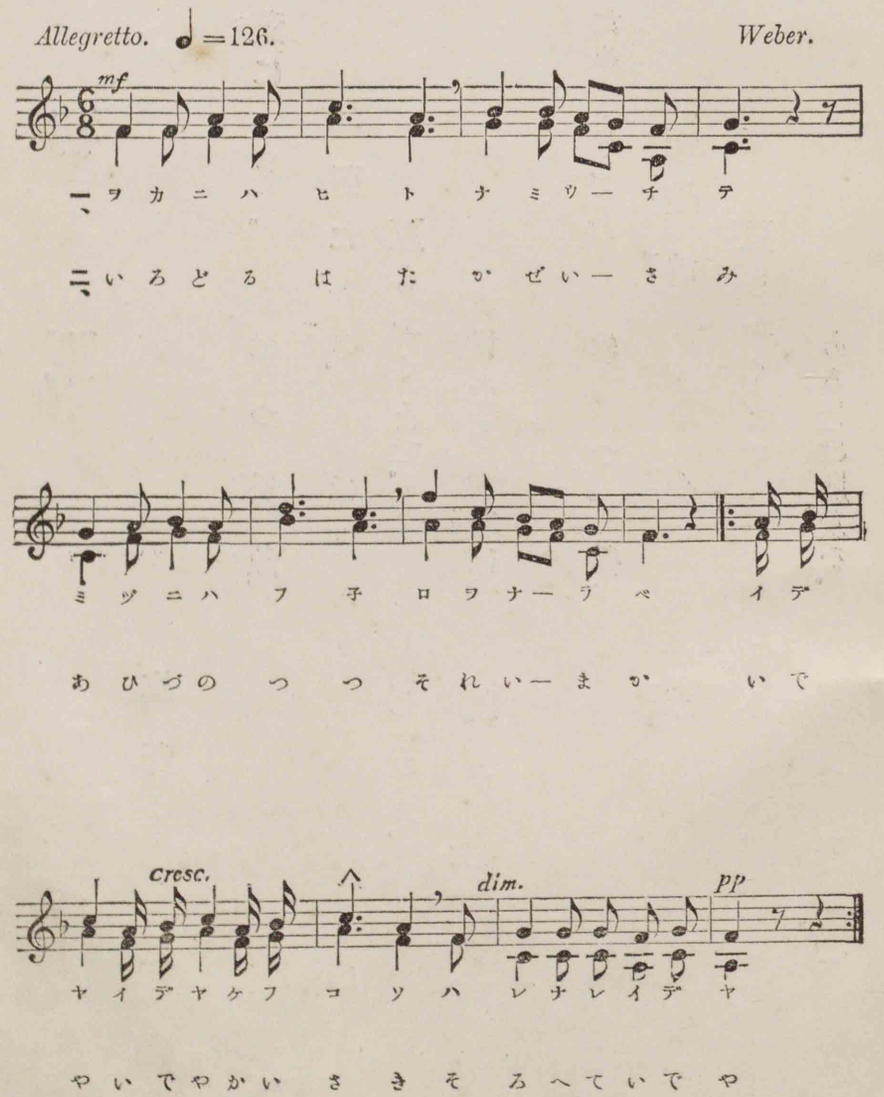
端艇競漕

旗野十一郎

一、陸には人、　波うちて。
　水には艇、　櫓を並べ。
　『イデヤ、　イデヤ。今日こそ、はれなれ、イデヤ。』（唱復）

二、色彩はた、　風いさみ。
　會圖の銃、それいまか。
　『イデヤ、イデヤ。楫先、そろへて、イデヤ。』（唱復）

端艇競漕



初夏

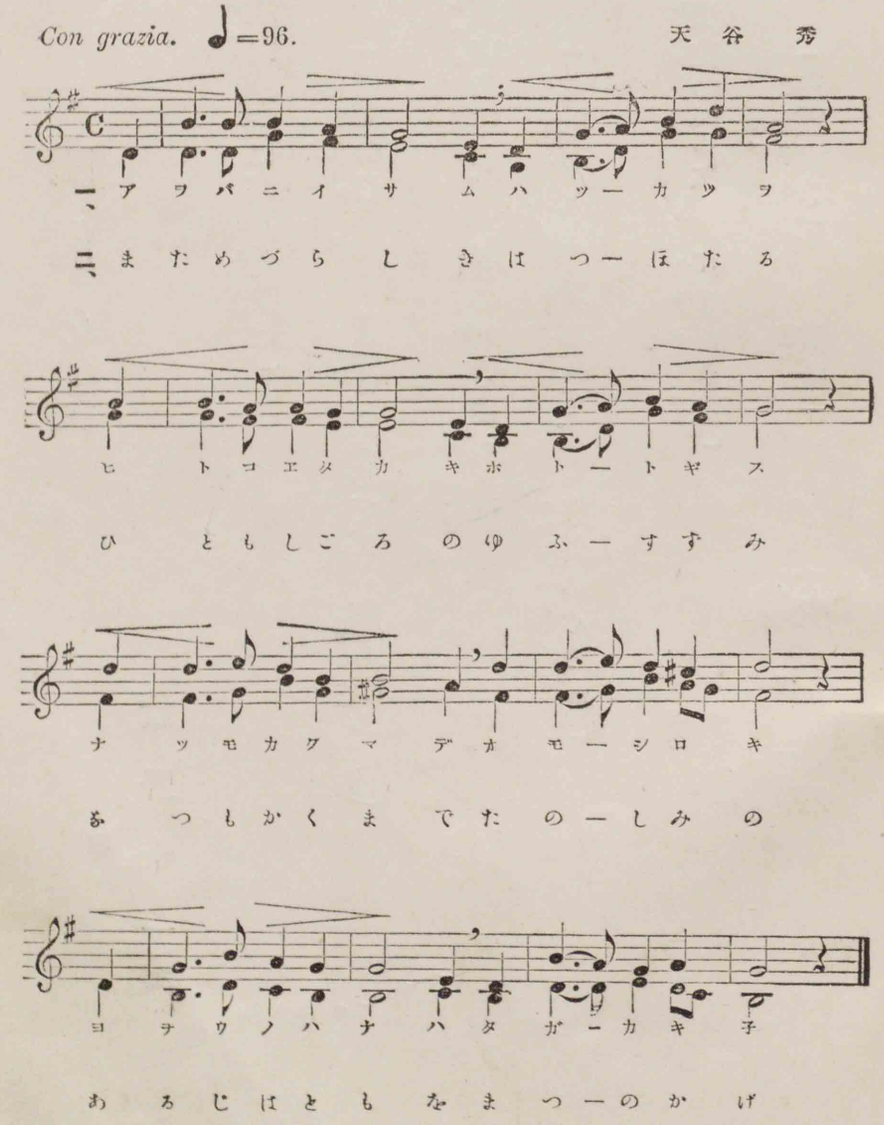
旗野十一郎

一、青葉にいさむ、　はつ松魚。
　一聲たかき、　ほとゝぎす。
　夏もかくまで、　おもしろき。
　世をうの花は、　誰が垣根。』

二、まためづらしき、　はつ螢。
　點燈時の、　夕涼。
　夏もかくまで、　樂みの。
　あるじは朋友を、　まつの蔭。』

初夏

天谷秀



山居の美

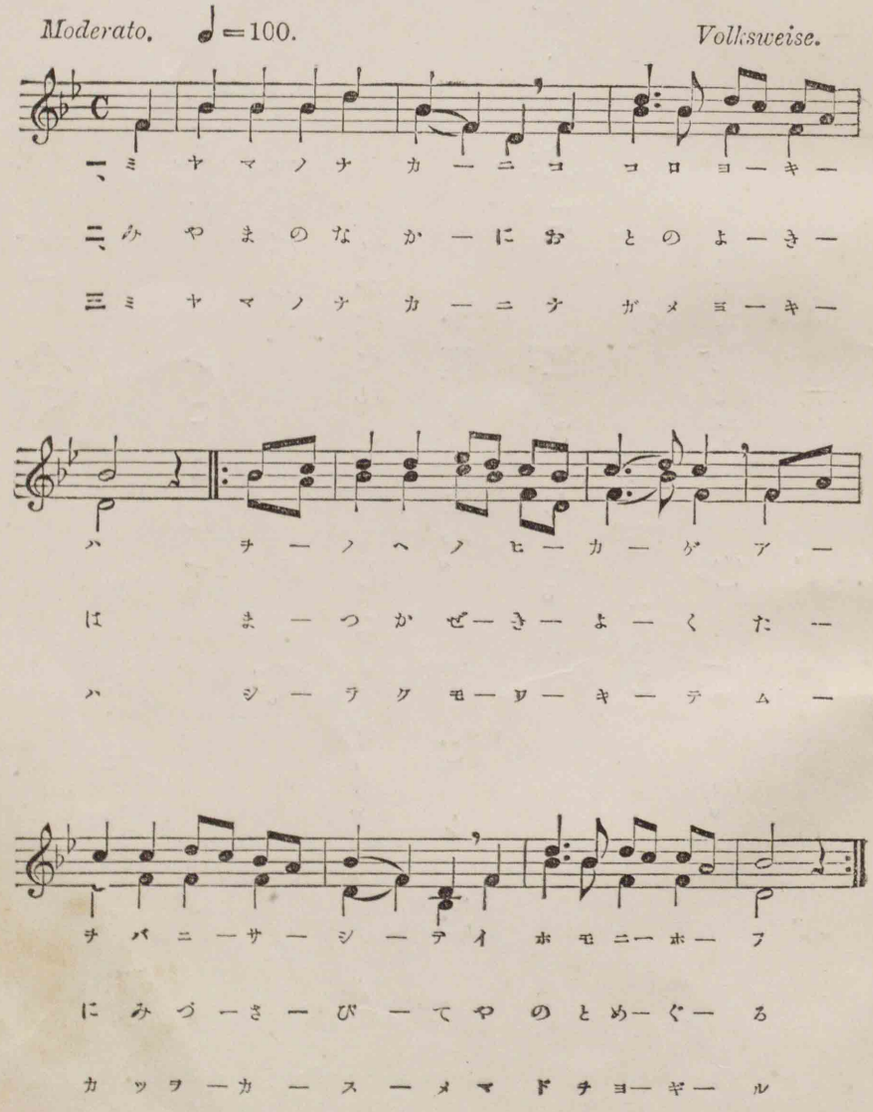
旗野十一郎

一、深山の中に、　愉快は。」
　『尾上の日影、　青葉にさして、　庵も映ふ。』(唱復)

二、深山の中に、　音の好きは。」
　『松風清く、　溪水寂て、　家外めぐる。』(唱復)

三、深山の中に、　眺望好きは。」
　『白雲湧きて、　向峰かすめ、　窓を横過る。』(唱復)

山居の美



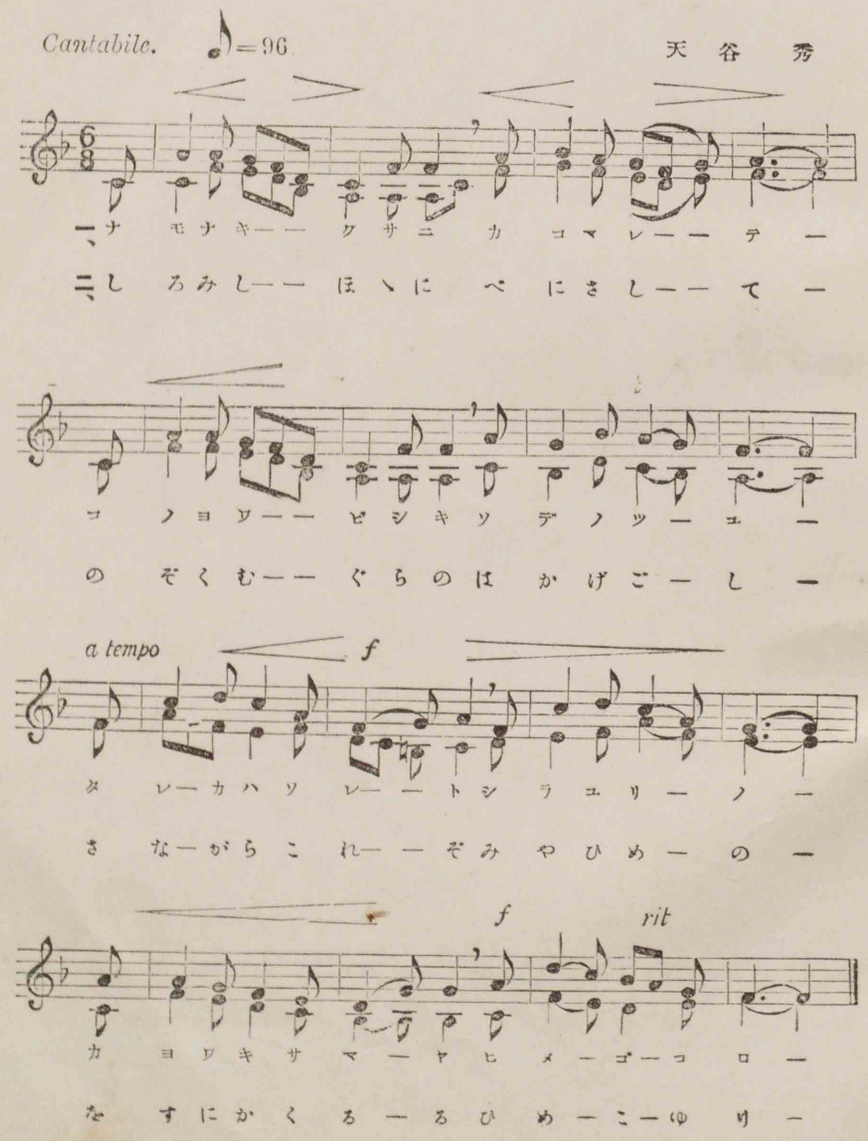
姫百合

旗野十一郎

一、名もなき草に、　かこまれて。
　この世わびしき、　袖の露。
　　誰れかはそれと、　しらゆりの。
　　か弱ささまや。　姫ごゝろ。』

二、白みし貌に、　紅さして。
　覗く葎の、　葉蔭ごし。
　さながら是れぞ、　宮姫の。
　小簾に隠るゝ、　姫小百合。』

姫百合



文部省定檢濟
明治四十二年三月五日

明治四十一年七月廿五日印刷
明治四十一年八月一日發行
明治四十一年八月廿五日再版印刷
明治四十一年九月一日再版發行
明治四十二年二月十二日三版印刷
明治四十二年二月十五日三版發行
明治四十二年三月八日訂正四版印刷
明治四十二年三月十五日四版發行

不許複製

定價金五拾五錢

著作者　東京市神田區今川小路二丁目十二番地　天谷秀

發行者　東京市京橋區銀座三丁目二番地　倉田繁太郎

印刷者　東京市神田區雉子町三十四番地　深山一郎

印刷所　東京市神田區雉子町三十四番地　成章堂

發行所　東京市京橋區銀座三丁目二番地　十字屋樂器店
電話新橋一二五九
振替口座東京七一五八

十字屋出版書籍大販賣所

東京市日本橋區數寄屋町九番地	林平次郎
東京市京橋區南鍛冶町一番地	松邑甚吉
東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地	目黑孫七
東京市日本橋區上槇町十番地	松星堂
東京市日本橋區本銀町二丁目八番地	文洋堂
東京市神田區表神保町三番地	太京堂
東京市京橋區尾張町二丁目二十六番地	東海館
東京市日本橋區吳服町十八番地	東隆堂
東京市神田表神保町二番地	北西屋
名古屋市本町三丁目	中川助
名古屋市本町五丁目	川瀨郎
京都市三條通寺町東入ル	十字屋
大阪市東區北久寶寺町四丁目百〇六番地	三野代次
大阪市東區備後町四丁目百五十二番地	三瀨松
大阪市東區南久寶寺町四丁目十九番地	前川善兵衛
大阪市東區北久太郎町四丁目五十二番地	吉井幸兵衛
鹿兒島市中ノ町	中田正書店
長崎山勝山町	崎喜太郎
甲府市柳町	柳澤書店
長野市大門町	西松堂

広島大学図書
2598004949

文庫
09
949